

## 文学交流入門 目次

はしがき——この本を読む人のために	4
<b>I 〈文学交流〉とは何か</b>	7
〈文学交流〉という視点	8
〈文学交流〉の理論	12
— <i>column</i> — グローバリゼーションとグローカリゼーション	16
<b>II 〈文学交流〉の歴史</b>	17
奈良時代〔6～8世紀〕の〈文学交流〉	18
平安時代〔9～12世紀〕の〈文学交流〉	22
中世〔13～16世紀〕の〈文学交流〉	26
近世〔17、18世紀〕の〈文学交流〉	30
近代〔19、20世紀前半〕の〈文学交流〉(1)	34
近代〔19、20世紀前半〕の〈文学交流〉(2)	38
<b>III 翻訳という〈文学交流〉</b>	43
翻訳の理論	44
海外から日本へ	48
日本から海外へ	50
翻訳文学とコンテクスト	52
<b>IV 〈文学交流〉に生きた近代の文学者たち</b>	55
ラビンドラナート・タゴール〔1861-1941 インド〕	56
エイミー・ローウェル〔1874-1925 アメリカ合衆国〕	58
アデレイド・クラブシー〔1878-1914 アメリカ合衆国〕	60
魯迅〔1881-1936 中国〕	62
周作人〔1885-1967 中国〕	64
謝六逸〔1898-1945 中国〕	66
ケネス・レクスロス〔1905-82 アメリカ合衆国〕	68
— <i>column</i> — スレチュコ・コソヴェル〔1904-26 スロベニア〕	70
— <i>column</i> — 植民地朝鮮から青山学院に留学した詩人たち	71

<b>V 〈文学交流〉の広がり</b>	73
〈文学交流〉としての神話	74
アジアの説話交流	76
日本と中央アジアの伝承の類似	78
インド僧・菩提遷那の〈文学交流〉——天平文化と『南天竺婆羅門僧正碑并序』	80
— <i>column</i> — たましいのありか——古今東西における壺の象徴性	82
— <i>column</i> — 『平家物語』と『シャー・ナーメ』に関する比較研究の状況	83
<b>VI 日本と諸地域の〈文学交流〉</b>	85
世界の中の日本語・日本文学	86
日本と中国の東北地方——「満州」時代の知識人及び東北地域の日本語教育	88
日本と上海——日中の文学者の対面交流	90
日本と台湾——「帝国」の狭間 <sup>はざま</sup> にあって	92
日本と太平洋地域——日本統治時代に始まった交流の光と影	94
日本とインド——宮沢賢治とロビンドロナト・タゴールの活動と貢献	96
— <i>column</i> — 親日トルコと日本の〈文学交流〉	98
— <i>column</i> — 日本文学とラテンアメリカ文学の交流	99
日本とカリフォルニア——強制収容所と海紅俳句	100
日本とカナダ——日本とカナダの古典文学	102
日本とフランス——レオン・ド・ロニーと『詩歌撰葉』	104
日本とドイツ——エルヴィン・フォン・ベルツのことなど	106
日本とスロベニア——民族のエネルギーと普遍性	108
— <i>column</i> — ミロシュ・ツルニャンスキーと『日本の古歌』〔セルビア〕	110
— <i>column</i> — ポーランドと日本との〈文学交流〉	111
— <i>column</i> — 日本とウクライナ	112
<b>VII 〈文学交流〉を学ぶために</b>	113
日本文学研究のための中国語	114
日本文学研究のための英語——世界との対話のための英語による日本文学研究	118
<b>あとがき</b>	123

## 【付記】

- ・海外の人名の日本語表記は、各執筆者の判断のままとした。
- ・引用文中には今日から見て差別的な表現も含まれるが、歴史的資料性を考え原文通りとした。
- ・引用に際して、歴史的仮名遣いは原文のままとし（ただし、踊り字は本来の文字とした）、漢字については、旧字体を新字体に、異体字は正字体または常用漢字体に改め、読み仮名は現代仮名遣いとした。

## はしがき——この本を読む人のために

### 〈文学交流〉とは

「文学交流」ということばは、聞きなれないかもしれません。最近になって、文学研究の本や論文のタイトルとして、しばしば見かけるようになりました。「文化交流」、「学术交流」、「芸術交流」ということばは、すでに広く定着しています。そうであれば、文学による交流を「文学交流」と呼ぶこともできるように思います。

「文学交流」ということばは、日本では遅くとも1930年代から使われています。文芸誌『文学交流』を出版した文学交流社があり、また、ヨーロッパ文学史の概説で、ナポレオンによって外国に逐われた<sup>お</sup>文学者たちの作品がフランスに逆輸入された時代が「文学交流の時代」と名付けられています（矢野<sup>やの</sup><sup>かづみ</sup>禾積『文学史概説 近世』岩波講座世界文学、岩波書店、1934）。戦後では、「文学交流」をタイトルに持つ規模の大きな本としては<sup>きむらき</sup>木村毅『日米文学交流史の研究』（講談社、1960、恒文社、1962）と、<sup>とみた</sup>富田<sup>ひとし</sup>仁、<sup>は</sup>長谷川<sup>せがわつとむ</sup>勉 編著『欧米文学交流の諸様相』（三修社、1983）があります。前者は、近代における日米の文学・文化が、双方の文学・文化に与えた影響を掘り起こした単著で、後者は欧米諸国の文学間の影響関係を考察した論文集です。

このように、「文学交流」ということばは、一方向の影響ではなく、異なる文学相互の影響を示す場合に使われてきました。この「文学交流」の研究は、比較文学研究の1部門として扱われています。しかし、この本では、「文学交流」を「異文化に立脚した文学相互の〈双方向〉的交流」と定義し、比較文学研究の1部門としてではなく、それ自体を一つの研究分野として、幅広い時間・空間の中で、さまざまな角度から、かつ体系的に考察します。このような意味での「文学交流」を、この本では〈文学交流〉と表記します。そして、〈文学交流〉の研究は、文学を通じて、異文化間の〈相互理解〉（“相互誤解”も含めて）が、過去から現在まで、また広い地域間でどのように行われてきたかを解明し、未来の〈相互理解〉に貢献することをめざします。

### 今なぜ〈文学交流〉か——この本のめざすもの

日本文学を中心に、〈文学交流〉を紹介しようとしたことには、次の二つの理由があります。

第1に、今日、日本文学がかつてないほどに、世界のさまざまな場所で読まれ、翻訳され、研究され、その地の文学に影響を与えているからです。たとえば、俳句は、西欧とアメリカ合衆国だけでなく、スロベニアやセルビアなどのバルカン半島の国々や、ポーランド、トルコ、南米などでも読まれ、それぞれの言語で「俳句」の制作も行われています。また、ポーランドでは、未来にタイムスリップした戦国時代の武士を描いたSF小説シリーズ『たけし』が人気を博しているといえます。さらに、さまざまな地域の日本文学研究の成果も、ブラジルの詩人による日本の表意文字についての論考など、見逃すことができないものとなっています。

こうした動きを、単なる「ジャポニズム」（日本趣味）と見るだけでは不十分です。むしろ、世界のさまざまな人々が、日本文学を人間文化の果実の一つと捉え、新たな文学・文化の可能性を見出そうとしていると考えられます。今や日本文学は、日本国内だけに閉じられたドメスティックな文学ではなくなっているのです。それゆえ、日本文学における海外文学の受容だけでなく、日本文学が海外の文学・文化・社会に与えた影響を考え、日本文学と海外文学が出会うことで誕生したハイブリッドの文学や、日本文学と海外文学とが、それぞれ独自のバック

ボーンを踏まえながら提起している人間の普遍的テーマなど、〈文学交流〉を見極めることが必要となっています。

第2に、“文学研究に社会的効用があるのか”という疑問に対して、「ある」という答えを示したいからです。21世紀に入って、世界の国々はかつてないほどに経済的繋がりを強めています。その一方で、経済的には自国優先主義、政治的にはナショナリズムが高まりを見せています。また、それぞれの国内において中間層が失われ、貧富の差が著しく拡大しています。国内外で急速に進む分断は、発達したSNSによってより深刻になっています。匿名性が高く、不満のはけ口となりやすいSNSは、憎しみの連鎖を生み出すからです。そして、2019年末に発生し、世界的規模で感染が広がった新型コロナウイルス感染症 COVID-19 と、2022年2月に始まり、世界的なエネルギー価格の高騰をもたらしている、ロシア連邦によるウクライナ侵攻は、世界の経済的繋がりの強さを改めて示すとともに、社会の分断に一層拍車をかけています。

このような時代状況の中で、私たちが決して手放してはならないものが、理性的な〈相互理解〉です。そして、その〈相互理解〉のための、最も深い次元の通路が文学です。インドの経済学者アマルティア・セン Amartya Sen は、子どもたちがアイデンティティを構成する要素として、言語、民族性、文化史、科学的関心とともに文学を挙げました（『人間の安全保障』東郷えりか訳、集英社新書、集英社、2006）。文学を通じて、異なる言語・文化を持つ人々のベースにある考え方や感じ方、またその人々が抱え持つ社会的課題を理解することができるのです。

### まずは心惹かれたところから——この本の構成

この本は七つのパートによって構成されています。「Ⅰ〈文学交流〉とは何か」では、この本における〈文学交流〉を理論的に説明します。「Ⅱ〈文学交流〉の歴史」では〈文学交流〉の歴史を、日本側に重点を置いて記述します。概説ではなく、トピックを絞って、〈文学交流〉の実際を紹介します（対外交流史の全体像については、<sup>むらい</sup>村井<sup>しょうすけ</sup>章介、<sup>あらの</sup>荒野<sup>やすのり</sup>泰典編『対外交流史』〈新体系日本史、山川出版社、2021〉が便利です）。「Ⅲ 翻訳という〈文学交流〉」では、翻訳の理論を解説し、日本文学の翻訳の問題を〈双方向〉的に考察します。「Ⅳ〈文学交流〉に生きた近代の文学者たち」では、日本文学を受容した海外の文学者たちを紹介し、彼らが近代社会に対して鋭い批判の目を持っていたことに注目してください。「Ⅴ〈文学交流〉の広がり」では、神話や物語・説話の交流を展望します。地域を超えた話型の共有から、記録に残らない人々の生き生きとした交流を思い描き、また人間の感性と思考の普遍性について思いを巡らしてほしいと思います。「Ⅵ 日本と諸地域の〈文学交流〉」では、トピックを絞って、世界の諸地域における日本文学の受容を紹介し、世界の多くの人々が日本文学に関心を寄せてきたことに驚くでしょう。なお、これらの地域は、青山学院大学文学部日本文学科と学術協定を結んでいる大学、または将来結ぶ可能性のある大学の所在する地域を中心に選びました。現在、日本文学科は多様な地域の大学との学術協定を積極的に進めています。「Ⅶ〈文学交流〉を学ぶために」では、中国語、英語によって日本文学を研究するための基礎知識と方法を示しています。

この本は体系的なものとなっていますが、それぞれの項目が独立しており、心惹かれたところから読み始められるようになっています。また、この本では日本文学に関わる〈文学交流〉を紹介しましたが、〈相互理解〉を深めるために、日本文学と関わった海外の人々を育んだ文学にもぜひ触れてほしいと思っています。（小松靖彦）

## 奈良時代〔6～8世紀〕の〈文学交流〉

### 「東アジア文化圏」

日本における、広い意味での〈文学交流〉は、4万年から3万年前に、人がユーラシア大陸から日本列島に到来した時から始まったとすることができます。彼らは歌や伝承を携えていたと思われます。日本列島定住後にも大陸と交流があったでしょうし、その後も、日本列島には大陸のさまざまな地域から人が波状的に到来しています。日本列島・大陸間や異なる出自の集団間で、歌や伝承の交流が行われたことが想像されます。

しかし、文献の上で〈文学交流〉を確認できるのは、中国を中心に朝鮮半島・日本・ベトナム・西北回廊地帯東部（現在の甘肅 Gansu 省）を範囲とする「東アジア世界」が成立した漢代 Han dynasty 以後となります。堀敏一によれば、この文化圏は、中国と周辺諸国間の朝貢（貢ぎ物の献上によって帰服を示す）と回賜（高額のお返しをして恩恵を与える）の関係で成り立っており、周辺諸国には、中国の法令・儀式に従う義務も課されました。

この「東アジア文化圏」において、日本と他国との本格的な〈文学交流〉が始まるのは、8世紀からです。とはいえ、それまでに分厚い人と書物の交流が積み重ねられていました。

### 日本と中国・朝鮮半島間の人の交流

日本と中国の交流は、文献の上では、西暦 57 年に、倭（「日本」以前の呼称）の奴国（九州北部の地域政権）王が後漢に使節を派遣したことに遡ります（『後漢書』）。その後、3 世紀編纂の歴史書『三国志』（『魏志』巻 30・東夷伝・倭人条）で、中国人にとっての倭人像が形成されます。それは、顔や体に入れ墨をし、水に潜って魚や蛤を捕らえ、気候温暖で、皆裸足で暮らしている、というものでした。5 世紀には、日本と中国の間で使者の派遣がたびたび行われましたが、この“南方の漁労民”という倭人のイメージは、梁 Liang で制作された、朝貢する諸民族を描く『梁 職貢図』でも踏襲され、倭人の使者は、濃い髭に、簡素な上着を着た裸足姿です。この倭人像は、7 世紀編纂の歴史書『隋書』（巻 81・東夷伝・倭国）に引き継がれます。

このようにイメージ先行の日本と中国との交流に対して、日本と朝鮮半島の間では、特に 6 世紀以降、直接的な人の交流が活発に行われました。6 世紀以前も交流は行われていましたが、分裂していた中国を統一して世界帝国となった隋 Sui・唐 Tang の朝鮮半島侵出によって、朝鮮半島の国々が日本との関係強化に努めたのです。日本の歴史書『日本書紀』は、日本と百済 百濟 (日本と特に関わりの深かった朝鮮半島南西部の国家) の双方の宮廷に関わった人々を記録しています。たとえば、紀弥麻沙は、日本の有力氏族・紀氏の男性と「韓の婦」の子で、百済の宮廷に仕え、聖明王〔聖王성왕〕の使者として日本に派遣されました。物部麻奇牟も百済の宮廷に仕え、聖明王の使者として日本に派遣され、扶南（メコン川下流のクメール族の国）の財物を献上し、また百済の東方領（東方の軍事指揮官）として新羅신라（朝鮮半島南東部の国家）を攻めました。彼らのような人々が活躍した背景には、近代国民国家よりも、「国境」や「民族」の観念がゆるやかであったことが考えられます。

### 書物の道

また、6 世紀から、百済を通じて、儒教経典、仏教経典、卜書（占いの本）・曆本などの書物が日本に渡来します。これらの書物を贈ったのは百済の聖明王です。この頃、建国まもない梁が、

儒教の復興に力を入れていました。その後、梁の武帝は仏教に傾倒し、『大般涅槃経』、『摩訶般若波羅蜜経』を講義するようにもなりました。周辺諸国は競って梁に仏像や経典を求めました。その中で最も熱心であったのが聖明王です。聖明王は、南進を目論む高句麗고구려（中国東北部～朝鮮半島北部の国家）に対抗するため、儒教と仏教によって梁との強固な関係を築くとともに、梁の政治・文化を伝えることで日本との関係も強化しようとした。一方、武烈天皇の死後、皇統が途絶えて混乱状態にあった日本にとっても、梁の進んだ政治・文化の導入は、内政を安定させる手がかりでした。《梁一百済一日本》という書物の道が作られたと言えます。

6 世紀末、隋の高句麗遠征が行われると、高句麗は日本との関係を積極的に求め、紙の製造技術などを身に付け、儒教にも通じた僧侶曇徴 曇瑠らを派遣します。貴重な護国経典『仁王護国般若波羅蜜経』なども、高句麗から日本に贈られたようです。

このようにして到来した書物を通じて、日本は中国文化を受容してゆきました。和文では、書物のことを「ふみ」と言います。「ふみ」は書物だけでなく、文字で書き記したものを指します。また、「ふみ」の語源は、漢語「文」の字音という説が有力です。漢語「文」は、模様・飾り・彩り、そして文字を意味します。古代日本人にとって、漢字という文字で書き記されたものが複雑でマジカルなものであり、その解説こそが重要であったことが窺えます。

「東アジア世界」の中での日本の位置（\* 遣唐使の次数は「日本歴史大系 普及版」に拠る）

630 年に日本から第 1 次遣唐使が派遣されました。838 年まで合計 17 回の遣唐使派遣が行われることとなります。第 1 次遣唐使についての中国側の記録が注目されます。太宗皇帝が、その道の遠いことを矜れみ、毎年の入貢をやめさせたのです（『旧唐書』）。朝貢は本来毎年行うものです。唐は、周辺諸国について、皇帝の支配の行き届く地域を「蕃域」として称号や官職を与え、それが及ばぬ地域を「絶域」としました。毎年の朝貢を免除され、称号も官職も与えられなかった日本は「絶域」でした。日本と唐の間には、東シナ海があり、上陸地揚州 Yangzhou から首都長安 Chang'an までは水路約 500km、陸路約 500km の道のりです。

日本は、701 年に第 7 次遣唐使を任命します。この遣唐使は、日本が「東アジア世界」の“文明国家”となったことについて、唐の認知を受け、他の周辺諸国に宣言するという使命を帯びていました。7 世紀の日本は「東アジア世界」の“文明”である〈漢字・儒教・律令・仏教〉の導入に力を注ぎ、701 年に「大宝」の元号を制定し、また大宝律令を完成しました。第 7 次遣唐使は、大使の上に執節使が置かれ、律令編纂に携わった粟田真人が任命されました。万葉歌人の山上憶良も随行。この遣唐使を迎えた唐（厳密には、則天武后が帝位にあった周 Zhou）側の歴史書『旧唐書』は、「日本は倭国と別種なり」と述べ、真人が儒教経典に通じ、温雅な容姿であったことを特記しています。“南方の漁労民”の国・倭国のイメージが覆されたのです。

### 阿倍仲麻呂と王維

以来、「東アジア世界」の“文明”を身に付けた遣唐使たちと、唐の知識人たちの交流が始まります。その中で、民族を超えた〈文学交流〉を実現したのが、阿倍仲麻呂（698 または 701-770）と王維 Wang Wei、李白 Li Bei/Li Po ら唐の詩人たちです。仲麻呂は 717 年出発の第 8 次遣唐使の留学生として唐に渡り、最高学府の太学に学び、官吏登用試験の科挙に合格して、司経局校書（太子図書館所蔵本の校異を担当）に任官、皇帝の侍従などを経て、秘書監（秘書省長官）に就任しました。在唐 36 年となる 753 年に、第 10 次遣唐使とともに帰国することになったと